

2016年(平成28)

2月29日

旧暦1月22日

発行所  
日本新聞協会加盟

南海日日新

# 伊仙町シンポ、東京で

# 「長寿・子宝の町」柱に

# 地方創生の旗手宣言

【東京支社】首都圏在住の移住検討者を対象とした「生涯活躍のまち伊仙町シンポジウムin東京」が27日、東京都千代田区の全国町村会館大ホールであった。約300人が来場。伊仙町は合計特殊出生率日本一(2・81)の「長寿・子宝の町」を柱とした「離島版CCRC」の推進による地方創生「事業を掲げ、移住者の受け入れ態勢構築に向けて、地方創生の旗手として全国に先駆けて取り組んでいくことを宣言した。

シンポは、同町など全国37自治体に配分された国の「地方創先行型(上乘せ)交付金」を活用し開催した。大久保町長は「地

域力や圧倒的な出生率は宝。全国に発信しなければならぬ。ここ

にのろしを上げ、燎原の火として全国に広がることを願う」とあい

移住者の受け入れ態勢構築に向けて、地方創生の取り組みを誓った伊仙町のシンポジウムは27日、東京都千代田区の全国町村会館

んか、という構想。(事業を進め)伊仙から新しい日本をつくってほしい」と激励した。

松田智生・三菱総研主席研究員が「新しい人の流れをつくる」のテーマで講演。「移住する元気なシニアは地域の担い手」として、教育、観光などの分野での活用を説いたほか、選ばれたためのターゲット戦略を説明。同町職員が、地域包括ケアシステム構築に向けた6次産業化や企業誘致、子育て支援金支給や小規模校存続といった取り組みを報告した。

パネルディスカッションは松田氏をモデレーターに、大久保町長と養老孟司・東京大学名誉教授、小野寺浩・鹿児島大学客員教授、Iターン者代表の萩原洋一氏(同町阿権)が語り合った。小野寺氏は、奄美大島と徳之島の世界自然遺産登録に向けて「地場産業と観光を結びつける経済構造がつけられるといい」と指摘。萩原氏は「まず伊仙を訪れてみて、ここで自分は何ができるか見つけてから移転することが大事」と述べた。質疑応答では、同町出身の女性から「帰りたい思いはあるが、金銭的にもすぐには帰れない。島のため自分のため、都会と島を結ぶ懸け橋として生きたい」との声が上がった。このほか、養老氏が「現代版参勤交代の復活と奄美・伊仙町」のテーマで基調講演した。

さつ。

石破茂・地方創生担当大臣は「伊仙町は、子どもは宝という意識

だけで日本一なのは

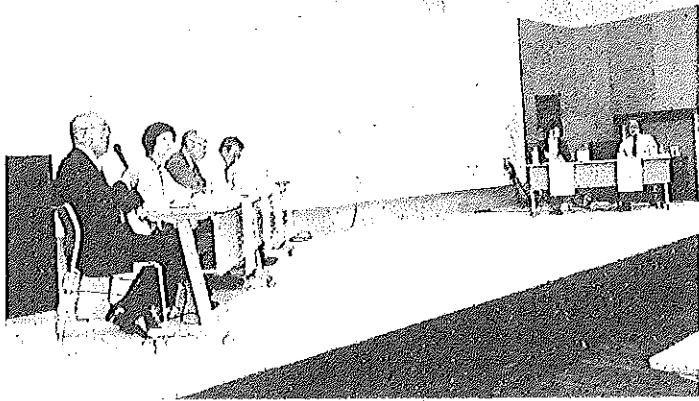
なく、ここだけのさま

ざまな取り組みがあ

る。日本版CCRCは

40〜60代で地方に来て

第二の人生を始めませ



島の自然と歴史、伝統文化に根ざした地域づくりを考察したシンポジウム＝4日、伊仙町

# 世界遺産と地方創生を活用

## 島に根差した地域づくりへ

伊仙町主催のシンポジウム「徳之島から世界へー国立公園・世界自然遺産・地方創生」が4日、同町のほーらい館であった。専門家の講演やパネルディスカッションがあり、島の自然と歴史、伝統文化に根ざした地域づくりを考察。「12・4徳之島宣言」を採択し、世界自然遺産に地方創生を活用した徳之島方式を世界に発信していくことを誓い合った。

### 伊仙町主催シンポ 「徳之島から世界へ」

シンポジウムは国の地方創生加速化交付金事業の一環。酒井正子氏(川村学園女子大学名誉教授)、寺田仁志

氏(鹿児島県立博物館学芸指導員)が徳之島の島唄や自然をテーマに基調講演した。酒井氏は1980年

代に島内で収録した映像について解説しながら、徳之島芸能の魅力を紹介。「自由奔放で溶けて遊び深い陶酔が

徳之島芸能の魅力。尽きさせない豊かさがあ

る」と評価した。寺田氏は徳之島の森の特徴について解説。

「山は低いが深く希少動植物の固有種が多いのが特徴。近年は外来種の植生が目立つ。次世代につないでいくために在来種の保全が必要」と呼び掛けた。池田榮史氏(琉球大学教授)は伊仙町の歴史の考察、永山悦子氏(毎日新聞社医療福祉部副部長)は世界遺産登録後の心構えについて説明した。

パネルディスカッションは、小野寺浩氏(長久島環境文化財団理事長)がコーディネーターを務め、酒井氏、寺田氏、池田氏、永山氏、大久保明伊仙町長が徳之島の自然と歴史、伝統文化に根ざした地域

づくりについて意見交換した。小野寺氏が世界自然遺産に関して解説。登録への動きが加速化し、18年夏ごろに決定する見通し。徳之島モデルとして世界遺産を活用した自然を核とした地域づくりを提案すべき」と述べた。

世界自然遺産登録後の徳之島の在り方について酒井氏は「コンパクトなところが徳之島の特徴。観光面では徳之島芸能を疑似体験できるメニューを考えるべきで都会の人間も求めている」と提案した。永山氏は「アマミノクロウサギという特徴的なものばかりでなく、牛とともにある生活など伊仙町の宝物を探して発信すべき」と提唱した。

大久保町長は「日本

社会が一極集中する中、長寿や子宝など伝統文化を大切に伊仙町の魅力を見だし、てくれる人たちが増えてきた。世界自然遺産を活用して地方創生に生かしていくことが重要だ」と述べた。

最後は「徳之島の豊かさをもう一度見直そう」と12・4徳之島宣言を採択して閉幕した。

# 東京で移住シンポジウム

# 行ってみたい！徳之島

## 伊仙町の魅力アピール



東京圏域在住の移住希望者を対象とした「行ってみたい！徳之島シンポジウム in 東京」(伊仙町主催)が12日、東京都中野区の中野サンフラザであった。都民ら約240人が参加。合計特殊出生率(2・81)日本一の伊仙町は「生涯活躍のまちづくり」を台言葉に掲げ、徳之島への移住と地域居住の生活スタイルを提案した。来島者が徳之島の魅力について「居心地のよい島」などと語った。

シンポは国の地方創生加速化交付金事業を活用し開催。尾辻秀久参議院議員、内閣審議官兼まち・ひと・しごと創生本部事務局の唐沢剛地方創生総括官、内閣府特命担当大臣(地方創生・規制改革)……

移住希望者を対象に都内であった徳之島シンポジウム12日、東京都中野区の中野サンフラザ

の山本幸三衆議院議員、園田修光参議院議員らも駆け付け、激励した。

開催地の田中大輔中野区長は「過密都市には待機児童などの問題がある。都市と地方が相互の強みを生かしながら生き生きと暮らせる日本を目指して、伊仙町とも縁を深めた」とあいさつ。

保育所の待機児童ゼロの久保明伊仙町長

は「島民の独立心や寛容の精神が長寿・子育て日本一につながっている」と語り、企業誘致促進による雇用の場確保や子育て支援の取り組みを紹介。「真の地方創生を目指し、在住者と移住者、Uターン者が協力してより良い町をつくっていく」と宣言した。

フリーライターの土屋季之さん、プログラマーで東京大学文学部院生の中村芳雅さん、昨年夏に伊仙町役場でインターンシップを体験した立教大学3年の相田夏紀さんが「行ってきたよ！徳之島」の題で発表し、現地で感じた魅力に「時間の流れがゆったりとしていて人が親切で豊かな自然が身近にある」と人間関係が緊密などを挙げた。

徳之島徳洲会病院の藤田安彦院長は「患者に寄り添う充実した医療を展開している。安心して暮らしている島」と徳之島の医療状況を評価した。

「徳之島の魅力・課題・未来」がテーマのパネルディスカッションでは、三菱総合研究所首席研究員で伊仙町生涯活躍のまち(離島版CCRC)構想検討会アドバイザーの松田智生氏をモデレーターに、芝浦工業大学の佐藤宏亮准教授、丸の内プラチナ大学受講生の木村健人氏・中村昌子氏、藤田院長、大久保町長、伊仙町未来創生課の松岡由紀氏が語り合った。

木村氏は「企業の経営者ら呼び込んで島のビジネスチャンスを探ってもらったり、社員研修などを展開してはどうか」。松岡氏は「徳之島で育つことで得られる人間性の強みをもっと地元住民、行政が自覚し、子どもたちに与えられる環境づくりを」などと提言。「ただの観光地にしてしまっただけの魅力が失われる。本質的なものを見つめた上で人を呼ぶ工夫を」(佐藤氏)などの指摘もあった。

シンポジウムの合間には徳之島ゆかりの唄者による島唄ミニライブ

フヤ島内2酒造の黒糖焼酎試飲会があり、終了後は島特産の黒砂糖とじゃがいも「春一番」が参加者全員に配られた。